

氏名	岡本 恵里
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	博乙第 2921 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	看護基礎教育のための呼吸器フィジカルアセスメント 用電子教材の開発
主査	筑波大学教授 博士（心理学） 庄司一子
副査	筑波大学教授 教育学博士 徳田克己
副査	筑波大学准教授 博士（保健学） 橋爪祐美
副査	筑波大学教授 博士（理学） 井田仁康

## 論文の内容の要旨

岡本恵里氏は、博士学位論文において、従来医師が行っていたフィジカルアセスメントについて、60年代から米国で看護師が学ぶべき内容として導入され、日本でも90年代後半になって導入され、年々そのアセスメント技術が求められるようになってきているが、その歴史は浅く、教育内容、指導法、評価、指導体制において課題が多いと述べている。著者は、日本のこうしたフィジカルアセスメントの看護教育における現状に着目し、博士学位論文で電子教材の開発とその効果検証を行い、この課題解決に取り組んだ。論文要旨は以下のとおりである。

著者は、本研究で、看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育およびフィジカルアセスメント能力を高めるための課題を整理し、この課題解決のための教材開発、効果検証を行った。

まず、第1章と第2章では、看護におけるフィジカルアセスメント教育の先行研究の検討を行った。その結果、胸部（呼吸器）の視診・聴診は、実習や現場での実施率は高いけれども苦手であること、学習は診察手技だけでなく、対象者を尊重し、安全で安楽、効率的な動きを含む内容が必要であることが指摘されている。

第3章では、研究1～3についての目的と構成、用語の定義について述べられている。

次に、著者は、第4章の【研究1】で、看護学生の実習指導を担う臨床看護師を対象としてフィジカルアセスメントの実践状況や学習ニーズを把握する目的で質問紙調査を実施している。その結果、学習ニーズの高い項目は、「胸部（呼吸器）聴診」と「肝臓・脾臓打診」とされた。このことから「胸部アセスメント」を学習テーマとして教育プログラムを開発し、遠隔授業および授業後の継続調査を実施している。研究参加者の8割が遠隔授業のICT教育を受け入れたけれども、打診技術は難しく、自信を持

つまでに至らなかった、とされている。著者は、アセスメント能力を高めるためには主体的継続的で繰り返し学習ができる電子教材の活用が必要であること、また学習に適していることが考察された。

次に第5章で著者は、呼吸器アセスメントの電子教材を開発し、看護学生を対象として学習効果が検討された。【研究2-1】ではアセスメント技術のポイントに加え、患者への説明や配慮を含む看護技術の自己学習用電子教材を開発している。効果の測定は技術試験の評価（精神運動領域）における学習前後の「アセスメントの準備・説明と同意・打診」等7項目の技術到達度の比較を行っている。その結果、学習前到達度の平均は33.6%であったが学習後は76.7%と大幅に上昇している。しかし、このうち1名は学習後、3項目の到達度が60%未満で、教員による面談と個別指導が必要とされた。著者は【研究2-2】で、教科書群と電子教材群の2群比較研究を実施し、学習効果は筆記試験による評価（認知領域・情意領域）、教材内容は質問紙によってこれを評価した。その結果、「触診」では電子教材群の方が学習後の得点が有意に高いという結果であった。質問紙による評価では、学生は、教科書群も電子教材群も「打診」は難しいという回答を得ている。

第6章で著者は、打診に焦点化した自己学習用電子教材を開発し、教材を用いた学習効果および教材の改良点が検討された。【研究3-1】では学習者が打診技術を模擬体験でき、技術の改善点や正誤のフィードバックがある打診に焦点化した電子教材を開発している。その後、まず、看護学教員に開発した教材を体験してもらい、教材内容に関する聴き取り調査を実施している。その結果、「打診音を聴きながらの繰り返し学習、技術の改善点や正誤のフィードバックがある」等が評価された。一方、「打診音の精度、肺葉区分のクリック箇所明確化」等は改良が必要であることが示されたため、さらに改良が加えられている。【研究3-2】で著者は、看護学生20名を対象に、教科書と改良した電子教材を用いて2群を作成し、自己学習前後の筆記試験による学習効果の比較研究を実施している。筆記試験では、「肺葉区分・胸部指標線・打診音の種類・肝臓の位置と大きさ」の4項目の評価を行った。教材内容評価に関する質問紙調査も実施した。その結果、「肺葉区分」と合計得点で電子教材群の方が自己学習後の得点が有意に高いという結果が示された。質問紙からは「肺葉区分」の解剖学的位置は両群ともに学習の難しさが指摘されていた。電子教材群の「学習の楽しさ・興味、学習の流れのわかりやすさ」の得点は高く、自己学習に活用できることが示されている。

第7章では結論と課題が述べられている。まず、本研究で開発された看護教育用電子教材の特徴として、(1)呼吸器フィジカルアセスメントの診察手技であり、学習者を尊重し安全で効率的であること。学習者が打診技術を模擬体験でき、技術改善や正誤のフィードバックがあり、打診に焦点化していること、(2)呼吸器アセスメントでは認知・情意領域、精神運動領域でも学習効果が確認され、学生にとって難しい「肺葉区分」において電子教材群が自己学習より有意に学習効果があることが確認された。

著者は今後の課題として、(1)看護の技術（精神運動領域）に焦点を当てた学年別学習課題の検討、(2)スピーカーの打診音の精度を高める、(3)コンピュータ学習が苦手、学習効果の上がらない学習者を把握し、他の学習支援に結び付けていく、をあげている。

## 審査の結果の要旨

### (批評)

本論文は、日本でまだ導入されて日が浅い看護師が行うフィジカルアセスメントの看護実践教育において、アセスメントの実施が困難とされる学習内容を指導者に調査し、これに基づいて教育方法としてフィジカルアセスメントのための電子教材を開発した。さらに、教材の教育内容を指導者、学習者に実施してその内容を精選し、教材の精度を高め、学習効果を実証するとともに、他の学習法と電子教材による学習効果の違いをも実証し具体的に明らかに示した。本研究は、看護教育の質の改善、看護師の看護の能力を高めるために貢献する論文として高く評価される。

平成 31 年 1 月 25 日，学位論文審査委員会において，審査委員全員出席のもと論文について説明を求め，関連事項について質疑応答を行い，学力の確認を行った。その結果，審査委員全員が合格と判定した。

よって，著者は博士（教育学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。